The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

放浪者の言語
——チャリャーパダの過去形——

北田　信

チャリャーパダにおいて用いられている言語は，新期インド・アーリア語（NIA）東部諸語群の古形であるといわれている．チャリャーパダの言語とNIAとの近さは，著しい．例えばベンガル語との共通の特徴，チャリャーパダの言語における過去形のL，未来形のB，属格のRが現れることなどはその良い例である．その一方で，幾つかの歌詞[1]においてはNIA的な要素は希薄で，アパブランシャに非常に近い．以下，その様子を観察することにしよう．

チャリャーパダには，二種類の過去形 -ia-（-iu, -ia, -iā etc.），-ila-（-ila, -ilī, -ile, -ilesi etc.）が現れる．前者はSkt. -ta-, MIA -ia-（-io, -iā, -iaṃ etc.）に由来するApabhraṃśaの形である．後者は新期インド・アーリア語の東部諸語に典型的な過去形語尾であり，Bengali, Maithili, Bhojpuri, Assamese, Oriyaなどに見られるものである．

チャリャーパダにおいて，二つの異なった形が現れることの説明としては，次の3通りを想定できる．

（1）-ia- は言語の古い段階のものであり，-ila- は同じ言語の新しい段階のものである．つまり同一の言語が歴史的変化を被る過程で，古い形を廃して，新しい形を採用した．この場合，前者を含むチャリャーパダの歌詞は古く，後者は新しい，と解釈できる．

（2）二つの形は，それぞれ異なる方言に属する．確かに，現代の状況をみると，新期インド・アーリア語の西部諸語は -ia- に由来する形を用いるのに対し，東部諸語は -ila- に由来する形を用いる．この解釈なら，前者を含む歌はインド西部で作られ，後者を含むものは東部で作られた，ということになる．

（3）-ia- と -ila- の機能が異なる．幾つかの歌詞（ex. 第15歌）においては，両者が同一の歌詞のなかに現れ，そういった場合，このように解釈すると都合がよい．

これらの説明には，それぞれ長所と短所があり，一概にどれかに決定しにくい．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

以下に，それぞれを吟味してみよう．

3つのうち一番すっきりとした説明は，（2）である．これについては同様な現象が現代語でも見られ，参考になる．たとえば，通常，ヒンディーの下位方言として分類されるビハール（パトナー）やベナレスで話される言語 Bhojpuri においてもLを持たない過去形と持つ過去形（つまりそれぞれ -ia-, -ila- に相当するもの）の両方が用いられる．この理由を，Tiwari は次のように説明する．二つの形は別の方言に属し，元々，東部方言の特徴であるLを持つ形があったところに，二次的に西部アパブランシャのLのない形が侵入してきたのだ，という．Bhojpuri が位置的に，西部方言と東部方言のせめぎ合う境界上にある，ということをよく示す現象である．よく似た状況を，チャリャーパダの言語にも当てはめることができるかもしれない．

ただ，この説では，同一の歌詞の中に両方の形が現れることの説明がうまくつかない．

これを解決しようとしたのが，Nilratan Sen の唱える解釈（3）である．

彼は，-ila- が単純過去を表わすのに対し，-ia- は受動態である，とする[2]．彼の説によると，-ia- に含まれる母音 i は受動態を表す．つまり，これは受動態現在形 3 pers., pres., pass., -iai（<Pkt. -ijjai）に現れる i と同じものである，という．つまり，出所の全く違う二つの i が，一つに合流してしまった，と Sen は考えるのである．

しかし，彼の説が強い説得力を持つわけではない．むしろ，チャリャーパダに二種類の異なった過去形語尾が現れることの，苦し紛れな説明として，このような解釈をしたのだろうと思われる．

ここで，チャリャーパダにおける語尾 -ia- と -ila- の用例を比べてみよう．

C.（= Caryāpada）2.5 aïsani caryā（Nom.）kukkurī-pāē（Ins.）gāiu（-ia- p.p.）
「このような修行歌はクックリパにより歌われた」or「このような行をクックリパが歌った」
C.2.2 kaneṭa（Nom.）core（Nom.）nila（-ila- p.p.）adharātī
「真夜中に敷物を盗人が盗った」or「真夜中に敷物は盗人により盗られた」

Nilratan Sen の解釈によれば，前者は受動態，後者は能動態である，という．そして，-e が鼻母音化したもの（-ē, kukkurī-pāē）は具格，これに対し，鼻母音化

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

しないもの（-e, core）は主格であるという．

しかし実際には，この枠組みから逸脱するような構文，例えば鼻母音化しない -e が -ia- と一緒に現れる場合や，その逆もある．結局，この説は説得力に欠ける．

むしろ，上に挙げた C. 2.5 のような文は，能格（ergative）構文と見なすのが妥当であろう．中期インド・アーリア語（MIA）の完了分詞を用いた構文 Ins. + Nom. + p.p. が，もはや受動態とは感覚されなくなり，Ins. = 主語，Nom. = 目的語と見なされて，新期インド・アーリア語の能格構文が出現することになる．その結果，過去時制ではもともとの受動態と能動態の区別が消滅してしまった．この難点を解決するために，新期インド・アーリア語の多くの言語では，能格構文とは別に，複合表現による新しい受動表現が作り出されることになった．

さらに中世・現代ベンガル語では能格が消滅してしまい，過去時制の構文において，主語も目的語も両方とも主格（直格 direct case）で現れる，という結果になる．その初期の例が上に挙げた C. 2.2 である．

ただし，-ia- と -ila- の間に機能の違いがある，という Nilratan Sen の観察は，的外れではないかもしれない．-ia- 語尾が人称変化をしないのとは対照的に，-ila- 語尾が，主語の人称に合わせて変化することを，彼は報告している．これには異論の余地がないわけではないものの，例えば，

C. 44.4: jathã āilesi tathā jāna. “［お前が］どのように来たのかを知れ”

このような例では明らかに，-ila- に二人称語尾 -si が接続されていることがわかる．

つまり -ila- の多くの用例においては，能格構文がもはや使われず，-ila- が主語に合わせて人称変化をするという，中世・現代ベンガル語の過去形の活用形式とよく似た状況になっている．

Nilratan Sen の説をそのまま鵜呑みにすることはできないが，-ia- と -ila- は性格を異にする，ということはどうやら言えそうだ．

以上の議論をまとめると，次のようになる．チャリャーパダの歌詞は今のところ 47 個，残っているが，それらに用いられる言語は，均質の一つの言語ではなく，雑多な方言形，雑多な時代の語形の集積である．歌が，複数の詩人の手を経て伝承されていった結果，このような重層性を持つようになったと考えられる．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

1）たとえば第27歌.
2）Nilratan Sen xxxv.

〈参考文献〉

Beams, John: A comparative grammar of the modern Aryan languages of India. Munshiram Manoharlal. 出版年不明　前書きには1871年とある.

Bhattacharya, Krishna 1993: Bengali-Oriya Verb Morphology. A contrastive study. Calcutta: Das Gupta & Co.

Cakrabartī, Jāhnabī Kumār' 1975: Caryāgītir' bhūmikā. Kalikātā: Di. Em'. Lāibrerī. ベンガル歴1382（=1975AD）

Chatterji, Suniti Kumar 1926: The Origin and Development of the Bengali Language. Vol. 1-3. London: George Allen & Unwin. 1970.（Sole distributors: Motilal Banarsidas, Delhi）（First published: Calcutta University Press, **1926**）

Davis, Alice Irene: Basic colloquial Maithili. A Maithili-Nepali-English Vocabulary with some structure notes. Delhi/Varanasi/Patna/Madras: Motilal Banarsidas. **1984.**

Kellogg, Rev. S. H. 1989: A grammar of the Hindi language. Third edition with notes on pronunciation by T. Grahame Baily. New Delhi/Madras: Asian Educational Services. 1989.

Kværne, Per 1986: An Anthology of Buddhist Tantric Songs. A Study of the Caryāgīti. Bangkok: White Orchid Press. 1986.

Masica, Colin P. 1991: The Indo-Aryan Languages. Cambridge/New York/Port Chester etc.: Cambridge University Press.（Cambridge Language Surveys）

Medhi, Kālirām' 1976: Asamīyā byākaraṇ' āru bhāṣātattba. Asam' Prakāśaṇ' Pariṣad'.

Sen, Nilratan（ed.）1977: Caryāgītikoṣa. Facsimile Edition. Simla: Indian Institute of Advanced Study.

Tiwari, Udai Narain 2001: The origin and development of Bhojpuri. Kolkata: The Asiatic Society.

Verma, Manindra K. 2007: "Bhojpuri." In: The Indo-Aryan Languages. Ed. by George Cardona & Dinesh Jain. London/New York: Routledge: pp.515-537.

〈キーワード〉　チャリャーパダ，新期インド・アーリア語，能格構文の消滅

（東方研究会研究員）

NII-Electronic Library Service